ディプスファンタジア～World that was～

悠久の螺旋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ディプスファンタジア～Ｗｏｒｌｄ　ｔｈａｔ　ｗａｓ～

【Ｎコード】
Ｎ１１２１Ｄ

【作者名】
悠久の螺旋

【あらすじ】
海洋貿易で発展を遂げた貿易都市タッフルール。貿易航路に出現した海竜によって、商人たちは交易を妨げられてしまう。海竜討伐に向った船団に乗っていた少年が、浜辺に打ち上げられる。それは破滅への秒読みであったが街の人々、世界は気がついていない。

第一章～逃亡～（前書き）

ディプスファンタジアはＨＥＡＤＬＯＣＫが開発し、スクウェア・エニックスが運営していたＭＭＯＲＰＧです。
惜しまれながらも２００５年１１月１３日サービス終了しました。
この物語はゲーム開始（サービス開始）暦２０１年の１８年前を舞台としゲーム中でＮＰＣの過去をおった物語です。
ゲーム時の私の記憶と手元にある本と想像とで舞台設定につかっています。ディプスファンタジアを知る方には違和感があるかもしれませんが一つの可能性として読んでいただければ光栄です。
ディプスファンタジアを知らない方にも楽しめる作品に書くつもりなので知らない方も是非とも読んでみてください。

第一章～逃亡～

エロウギア大陸南西部に繁栄するダロス王国。
北西から東南へ、円を描くように聳えるバザルト山脈が王国全土を取り囲み、天然の要害が他国からの侵入を頑なに拒んでいる。
南西には、大小さまざまな島が点在し、交易の中継点として発展しているため、軍船が近づこうものなら即座に王国へ知らされるものである。
なにより、この王国を征服時の最大の特典といえる、発達した海洋交易点を破壊するなど愚の骨頂といえた。
そのため、過去ダロス王国へ侵攻してきた国は、バザルト山脈をはるばる越えて進軍してきたのだ。

南西に位置するタッフリールは、近海に点在する大小さまざまな島々と海路を結び、貿易都市として発展していた。
街の中心部に建設された、高層建造物クイーンマーメイドは灯台の役割も果たし、観光名所のひとつとなっている。
五の月は、波が穏やかな日が多く海洋交易が活発になる時期でもあった。
しかし、例年港を賑わす外来船は見受けられず、近海を行き来する小型船すらまばらにしか見受けられない。
その原因は、航路に立ち塞がる海竜の存在であった。
この海竜は本来、十二の月の水温が極度に下がった寒冷海でしか活動しないため、十二の月であろうとも、海水を温める特別な装置を取り付けた船ならば、恐れることなく出航できた。
なのに五の月、水温が暖かいこの時期に現れ立ち去ろうとしない。
当然、タッフリールの商人たちは武装船団を繰り出し、排除を試みた。
結果は現在の状況が物語るように、敗北し、それ以降討伐に向っ

た船団も最悪の結末を迎えるはめになる。
活気あるれていた港は、閑古鳥が鳴いている。
自らの船を失った商人たち、仕事を失った水夫らは酒場に篭もってかつての栄光に浸るばかりだ。
影響は遠海だけでなく、近海の漁師たちにも影響をもたらしていた。
海竜が現れてから、漁師たちも魚が獲れない日々が続き、船を手放し漁師を辞めるものが続出していた。
それでも諦めない強い心の持つ主や、生まれてから一筋で漁師しかできない者が頑張って今日も船を出すのだ。
船団が駐留する港の海の色は、吐き出された廃棄物などによって、澱(よど)んだ緑色になってはいるが、ここ浜辺はまだ澄んだ青色の海が広がっている。
年々、漂流してくるゴミが増えてくる中では、楽観できるものではなくなっているが。
一人の老漁師が夜明け前に、自分の小船に網を積み込んでいるとき、浜辺に打ち上げられている何かを発見した。
初めは流木か何かだろうと、関心がなかった漁師だが、闇夜が明けていくうちにそれが人だと判別できた漁師は慌てて駆け寄った。

打ち上げられた異国の少年――老漁師が聞いた名前を覚えれなかったため、こう呼んだ――は、飲んだくれていた商人らには恰好の獲物だった。
辿りつく外来船がいないため、情報が一切入ってこない今、どんな些細な情報でも仕入れたいのだ。未来への希望を見い出したいという、願いも入っていたのかもしれない。
異国の少年の話によれば――
彼の仕える王国マザーランドは海洋交易が盛んなため、海竜出現により外交遮断はかなりの痛手といえた。
海洋交易を主に国を発展させただけあり、海軍も充実しており他

国から見ても一目されている。
その海軍の最新精鋭軍船を含む、船団を海竜討伐に派遣したのだ。
その一隻に、騎士見習いとして少年は従属していた。
船団の士気は高く、海竜発見後はさらに高まった。
海竜の抵抗は激しく、甲板に打ち付けられた尾ひれによって、幾人もの騎士、水夫が命を落とした。
距離をとり包囲網を敷いた船団の中で、砲弾や銛を存分に打ちこまれていく海竜はほどなく逃走をはじめた。
海路の安全を確保せんがために、船団が追走するのは当然といえた。
追い詰めたと思えた場所は、海竜の棲みかだったのだ。
新たに現れた海竜によって、船団は一隻一隻と確実に沈められていった。
少年は幸運にも小船で脱出できたのだが、その小船も嵐に遭遇し難破してしまい木屑にしがみつき、漂流するはめになったのだ。
話を聞き終えた商人らの、落胆さは想像を絶するものだった。
話し半ばでは、噂に名高い海軍船団の登場に興奮を抑えるのに必死な者までいたのだから。
数日、老漁師の家で世話になりながら、押しかけてくる商人や水夫を相手にしていた少年は、手土産の食料などで食いつなぐことができた。
しかしながら、少年から聞きだせることがなくなり、希望が見い出せないとわかると会いに来る人間は居なくなってしまった。
老漁師ですら、未来を悲観し小船で飛び出したきり帰ってこなくなった。
少年はあてもなく、ただ砂浜に座り込み海を眺めるしかできなかった。
老漁師の家には、食料などの蓄えなど一切なく、未来を悲観した老人の気持ちが少し解ったような気がする、と少年は空腹を堪えながら考えていた。

「マドゥ」
突然、背中からかけられた声に、少女はびくっと背筋を伸ばした。
背中まで届くかどうかまで伸びた青緑色（エメラルドグリーン）の髪が、ふわっと広がり、日差しを浴び煌く海面がその髪の美しさを惹きたてている。
「もう、びっくりさせないでよアニキ」
振り向きざまにマドゥと呼ばれた少女は、相手が誰かわかっているようで、抗議を訴えている。怒っている態度をとって見せてはいるものの、表情はほころび喜んでいるとも、照れているとも受け取れる。
「あの少年に夢中になりすぎてたからだろ」
マドゥの隣まで歩みよった兄のアルマは、妹の視線の先にある人物を眺めた。
アルマは今年で十三歳を迎えた少年だ。
昨年、成人の儀を行い大人の仲間入りを果たした。
妹同様の青緑色の髪を後ろで束ね腰まで垂らしている。幼い頃から父親と共に漁で鍛えられた体躯は、同世代の若者と比べると凌駕している。
「ほら、これを持っていけよ。どうせ今日もまた声をかけられないでいたんだろ」
アルマは布袋に包んだ、食欲のそそられる匂いを発するパンをマドゥの前へ差し出した。
浜に打ち上げられた少年に興味を持った妹が、連日話を聞きたくて通って入るが、臆病さが手伝い遠くから眺める日々が続いた。
しばらくは人が多く話しかけられなかった、と話すマドゥをそうかそうかと聞き流していたアルマであった。
が、どうやらそうでないと悟った彼は、妹のため一肌脱ごうと策を講じたというわけだった。
「きっとお腹すいてるはずだ、早く持っていってあげな」
マドゥは喜び、布袋を素早く奪い取ると異国の少年に向って駆け

ていった。
座っている異国の少年に、不器用に差し出すマドゥを遠目に眺めていたアルマは、妹の発する言葉が聞こえてくるようで苦笑をもらした。
「そろそろ、手助けが欲しい頃かな」
アルマの想像通り、大きく手を振り自分を呼んでいるマドゥの姿が目に入った。

「ほら食べなさいよ」
突然、駆けてきた少女が袋包みを差し出してきた。
異国の少年は、包みから漂う匂いにゴクリと喉を鳴らした。
それを知られたと思い、顔を赤くする。
が、少女はそっぽを向くように顔を背けていたため、気がつかなかったようだ。
いつまで経っても、受け取ろうとしない少年にマドゥは、ちらりと視線を向ける。
相手が座っているため、ハッキリとはわからないが、着ている服からして見慣れないもので興味をそそられる。
マドゥらが普段から着ている衣服は、肌に密着するように着こなし、女性なら豊かな特有の曲線をかもしだし、男性なら鍛え上げられた体躯を惜しみなく披露する。
まだ幼さを存分に残すマドゥには、残念ながらそのような特有さは出ていないようだが。
異国の少年の着ている服は、上下一体となっており、ぶかぶかで痩せているのか、太っているかなどの判断がつきにくかった。
「どうして僕に？　知り合いではないとおもうんですが……」
ここにきて以来、物々交換のように知りうる情報と食べ物を取引してきた彼だが、価値がない情報だと商人らは応じなかった。
目前の獲物に、欲に任せ飛びつこうものなら後で、どうなること

かと用心しているのだ。
取引は慎重に！　甘い言葉には気をつけろ。これが彼がここへきて学んだことだった。
なんの条件もなしに、食べ物をくれるとは考えれなかった。
人の言葉を疑うことなく育ってきた、純粋な心を持つ少年は、ここでは疑う気持ちを強く持たないといけないと考えはじめていたのだ。
「いいから食べなよ。お腹減ってるんだろ」
一方、気の利いた言葉一つもかけれないマドゥは苛立ちはじめていた。
腹が減っているのに、どうして受け取らないのかと。
受け取ってさえくれれば、隣に腰を下ろし、念願の異国の話を聞きだせるというのに。
受け取るのを警戒する者、押し付けるように差し出す者、意地の張り合いのように膠着してしまった。
はぁ〜、と肩をがっくりと降ろしたマドゥは、この状況を打開すべく遠くにいる兄アルマへ大きく手を振り、助けを求めた。

「いやー、ごめんごめん。俺の妹が怪しげな行動をとってしまって」
アルマが頭を掻きながら、謝罪の言葉をくるなり言い放つ。
その言葉には、マドゥはひどくご立腹らしく、恨めしそうに兄であるアルマを睨んでいる。
「君は浜に打ち上げられた少年だろ？　最近は訪ねてくる人もないようだから、腹すかしてるんじゃないかと思って俺がマドゥに行かせたんだよ。受け取るなら女の子がいいだろ？」
アルマは彼なりに妹の失態を、請け負おうとしての行動だった。
マドゥもそれがわかったようで、とりあえずはと睨むのはやめたようだ。
「とりあえず、他意はないから食べなよ。話はそれからだ」
後の言葉はマドゥに対してだったかもしれない。

そういって異国の少年の隣へ腰かけるアルマ、慌て気がついたように兄に習い腰かけるマドゥ。
お目当ての少年の隣は空いていたのに、慌てたためか兄を挟むように腰かけてしまい、一度下ろした腰を上げてまで隣へ座りなおすなど、今の彼女には出来るはずもなかった。
「ところで、君の名前はなんていうんだい？」
パンが全体の半分となり、腹の具合も落ち着いたかなという辺りで、アルマが異国の少年に話しかけた。
「ゴホッ、ゴホッ……」
タイミングが悪かったのか、声を出そうとした少年が咽てしまう。
名前を聞くのなら、まずは自分のほうからなのりをあげるべきだ、と自国の論理を発しようとしたのだが。
少年は、これも女王陛下のたしなめだと自分を罰し、こちらから答えることにした。
「レ、レオン・ランザットです。そ、それよりも、あなた方の名前を教えてもらえますか」
レオンと名乗った少年が、早言で主導権を変更させようと試みる。
「俺はアルマ、こっちは妹のマドゥだ」
「アニキの名前って良いと思わない？　もしかしたらあたいの名前になったのかもしれないんだよ～」
ようやく話すきっかけをつかんだとばかりに、マドゥが乗りだす。
レオンがほっと、胸を撫で下ろしたのをアルマは見逃さなかった。生まれてこれまで嘘とは無縁の世界で暮らしてきたのだろう。名乗るときの動揺は、誰もが怪しむだろう。
ただ、悪意からではなく、身を守るために考え合ってのことだろうとも判断できた。
ほんの数日の間に、商人たち口巧者に散々やられたのだろう。うかつに正直に話す危険性を学んだのかもしれない。
そう考えると、異国の少年と言っているが、彼からしたらここが異国でしかも一人放り出されたのだと不憫に思えた。

アルマが考え込んでいる隙に、マドゥはレオンに積極的に話しかけるようになっていた。

「聞いた話じゃ、救出の船もそう簡単に来そうにもないし、こちらから船を出すにも問題が山済みだ」

一通りの話を伺ってから、アルマは持論を言った。

そして長い期間滞在を余儀なくされるだろうと、自分らの家へ来るように勧めた。

予想外の兄の提案に、マドゥは大喜びのようだった。

レオンは、はじめてあった自分にどうしてこのように親切にしてくれるのだろう、と考えてはみたが選択肢はないと思われ、この申し出を受けようと決めた。

アルマのほうは既に立ち上がっており、自分に背を向け歩き出している。

自分が断るとは考えなかったのだろうか？

そんな疑問がよぎる中――

「さあ、行こうよ。今お父さんたちは出稼ぎにいってるから、遠慮しなくていいよ」

マドゥの差し出された手を握りかえし、固く握手を交わしたようになる。

彼女とは打ち解け、かなり好感をもてるようになっていたし、もっと知りたいという願望も生まれていた。

今新しく生まれたこの絆を頼り、離すまいと誓いレオンは重い腰を上げた。

「こらー、レオン！　また勝手に味付けしただろ。あれほど濃い味付けするなっていったのに」

６の月半ばを迎え、レオンがタッフリールに来てひと月あまり過ぎようとしていた。

知り合った当初は、気を使いなるべく丁寧に猫を被って話していたマドゥも、今では完全に地声で話すようになっていた。
レオンのほうも、この兄妹に打ち解け隙を見ては、マドゥの料理にちょっかいをかけれるほどに馴染んでいる。
「もうこんな濃い味は食べれたもんじゃないよ」
怒ってるぞ、とアピールしているがそれが本気ではないのは十分にわかっている。
３０日あまりの寝食を共にしてきたおかげで、マドゥの性格を随分つかむことができた。
乱暴な男言葉を必死に使おうとしているのは、寂しがりやで気の弱さを見抜かれないための、彼女なりの努力であった。
本心では、優しい言葉をかけてもらい、甘えたいのだ。
本国では騎士見習いとして仕え、今回の遠征から帰還すれば正式な騎士へと昇格するはずであった。十二歳ながら叙勲を受けるだけあって、騎士としての腕ではなく、社交界での貴婦人らの好評が主であったが。
そのおかげもあり、レオンは婦人の扱いに慣れていたといえる。
女性には優しく紳士であれ！
騎士道精神を叩き込まれた折に、よく聞かされたフレーズを思い出していた。
マドゥにおける感情は、その一端と思い、自分の中に生まれた別の感情を気づけないでいた。
発端は過去に何かあったらしいのだが、そこまで打ち明けてもらえるまでなるには、まだまだ時間がかかりそうだ。焦る必要はない、時間は存分にあるのだから、とレオンは自分に言い聞かせた。
「ごめーん、マドゥの料理をもっと美味しくしたかったんだ」
台所では少しでも味を薄めようと、食材を追加投入している音が鼻歌と共に響き渡ってきた。
レオンはアルマの勤めている警備隊の手伝いをしたり、マドゥの

家事の手伝いをしながら、暇を見つけては港へ足を運び情報収集に奔走していた。
しかし日々、港へ入港してくる船は減り続け、一隻も来ない日もあった。
遠海に影響を与えていた海竜は、近海にまで影響を及ぼすようになってきていた。
二人の両親のように、漁師業に見切りをつけ仕事を求め、出稼ぎに出るのも仕方がないことだなとレオンは深く心に感じていた。

「ふぁわぁ～あ、ただいま～」
日も暮れ始め、マドゥの完成した料理が食卓に並びはじめると兄のアルマが間延びした声と共に帰ってきた。
「お帰りアニキ、いいタイミングだね。座って待ってて」
「あっ、お帰りなさい。お疲れ様アルマ」
手に薪を抱えたレオンが、テーブルの椅子に腰掛けているアルマに気がつき労いの言葉をかける。
「暇、暇」
全然疲れてないよと、手を振る仕草で伝えてくる。
「マドゥー、かまどの薪はもう足りてるかい？」
足りてるー、との返事にレオンは話の矛先をアルマへ戻す。
日々、警備隊へもたらされる情報を聞くのを楽しみにしているのだ。
「相変わらずだな、入港する船が減ってるのを嘆くだけだよ。あ～ただ、こちら側からも討伐隊が編成されるかもしれないって話だ」
身を乗り出してくるレオンを手で制し、申しわけなさそうにつけ加える。
「討伐といっても海竜ではなく、それに乗じて近海を騒がしている海獣をだよ」
海竜討伐に出るのならば、志願しようと息巻いていた雰囲気が十分に伝わってきた。

落胆するレオンを見て、説明の仕方が悪かったかなと、アルマは少し反省した。
「さあ、これで全部よ」
湯気の上がるスープを持ってきたマドゥが、召し上がれと、自信ありげに二人の前に置いていく。
「なんだか、今日は量が多いな。俺にもっと働けってことか」
マドゥが唇をにぃっと広げ、表情でそれに答える。
二人して声を出して笑う、いつもなら吊られて笑うレオンが黙っていた。

「レオン食事中も元気なかったね～、アタイの料理が美味くなかったのかな～」
テーブルに片肘を立て体を反らしたマドゥが、むすっとしながら兄のアルマへぼやく。
「そんなことはないと思うけどな、マドゥ風のいつもの薄味だったし」
そして二人はちらりとアルマから見て正面、マドゥから斜め背後へ視線を送る。
レオンがこの場にいないような会話をしているが、彼はずっと同じテーブルにいるのだ。
食事前から落ち込んでいる様子のレオンを、元気付けたいのと、かまってもらいたいマドゥなりの表現だったのだが、レオンには届かなかったようだ。
マドゥは上半身をテーブルへ寝かせ、本格的にぶぅぶぅ言い始めた。
アルマは、あちゃーっと手で頭を覆ったが、もうどうすることも出来ないようだった。
彼女がこう拗ねてしまうと、きまってあの話題が持ち上がるのだ。
「やっぱさー、名前の付け方が問題だったのよね。だってさ、そりゃどちらをつけようか迷うのは仕方ないとしても、落選した名前を

二子につけるなんて、その子が可哀想よ」
その二子とは他でもない、マドゥだったのだ。
うかつにも父親が、マドゥの誕生日にその事実を漏らしたものだから、その日はなだめるのに苦労したのをアルマは覚えている。
そりゃあ誰だって、考えるのが面倒だったから、一子のとき候補から漏れた名前をつけたなんて聞かされれば、と幼いながらも同情したのも深く覚えている。
それ以降、なにかと拗ねると、その話題を持ち上げてくるようになってしまったのだ。
かなり根に持ってしまったらしい。名前を変えて欲しいなどと、無茶を言って困らせるのも多かった。
「わかったよ、じゃあ俺が爺さんになって老衰して天界へ旅立ったら、この名前あげるよ。そうすればアルマはもう少しだけ、生きていけるしね」
決まってアルマは、こんな風に訳のわからない返し方をするのだ。
「えー、なにそれ、変わりにアタイに天界へ行けってことなの～」
テーブルと親密な関係となっているマドゥが、こもった声で不平をもらす。
悩ませ、頭を使わせ気分を紛らわせるのだ。
「いや、そうじゃないと思うよ。それよりも僕はマドゥの名前は良い響きをもっていると思うけどな」
ここへきてレオンが会話に入り込んできた。
もう少し早く気を利かせてくれよ、とアルマの恨めしそうな顔を気にもとめた様子もない。
「本当はね、マドーラっていうんだ。それなのに呼ぶのが面倒だからってマド、マドって言うもんだから、知らない人なんかもそういっちゃって、気がつけばマドゥさまのできあがりってわけ」
勢いよく起き上がったマドゥが、肩を竦めて説明している。
それでも妹の機嫌が直ったようなので、自然と笑みがこぼれるアルマだった。

ドーン、と何かが爆発するような音と、体を揺らす振動が夕食後の談笑を楽しむ三人を襲ってきた。
開け放たれた窓からは、人々の喚(わめ)くような声が遠くから聞こえてくる。
「なに？　どうしたの？」
「海獣が港に現れたのかも！　様子を見てくる。レオンはマドゥを見ててくれ」
アルマは返事を待たずに、レオンを一瞥だけすると駆けだしていった。

港への到着を待たずに街の異変は感じとることができた。
夜中の静寂さは、いとも簡単に失われていた。
祭りごとで興奮した酔っ払いなどではない、絶叫と悲鳴からである。
街の中央で観光名所でもあるクイーンマーメイド塔が、炎上していた。ちらほらと一般の民家からも、火の手があがっている。
それだけではない、無数の蜥蜴(とかげ)が人間化したような奇妙な生物が徘徊し、人々を襲っている。
耳元まで裂けた巨大な口からは、鋭い牙が覗き見え、噛みつかれればひとたまりもないだろう。
さらに蜥蜴人(リザードマン)らは、巨大な曲刀(ファルシオン)と小盾(バックラー)を携えている。
チロチロと不気味に出し入れされる細長い舌は、見た人の恐怖を煽り立てた。
街の警備隊が出動してきたが、燃え広がる火災に加え、無数の蜥蜴人を相手にするのは不可能に思えた。
時を待たずして、あふれ出てくる蜥蜴人に警備隊は撃退不可能と判断し、街人の地下への避難を誘導しはじめた。
タッフリールの地下は、シェルターとなっており街の住民がすべて入っても、数ヶ月暮らすことができる食料が保存してあるのだ。

「二人とも無事か！　急いで地下に避難するんだ」
急ぎ帰ってきたアルマが、部屋の片隅で隠れるようにしている二人を見つけ叫んだ。
「アニキ！　一体どうしたっていうんだい。あちこちから悲鳴やら叫び声が聞こえてるよ」
不安に駆られていたマドゥは、兄の無事な姿に喜び抱きついた。
「何があったのですか？　アルマ」
「話は後だ、ここからなら一番近いのは……　3番地下の入り口だけど、あの様子じゃ……　よし5番地下の入り口に行こう。ついてきてくれ」
アルマはマドゥの手を引き、レオンについてくるように促した。

レイア・エーリノスは、食事を終え自室で髪を梳きながら、恋人に想いを馳せていた。
ここタッフリールでは早いものは十三歳で成人を迎える。
女性が成人を迎えるということは、婚姻の準備ができましたよと、周囲に知らせ婚約（プロポーズ）を待つのだ。
レイアは十五の時に成人となり、盛大に祝われた。
美しい金髪に、まだあどけなさの残る容姿だが、屈託のない彼女の笑顔に惚れこんだ未婚の男性は競って婚約をせまった。彼女が成人するのを待ち望んでいた多かったようだ。
しかし、彼女は十九歳を迎えようとする今でも未婚であり、婚約をことごとく断り続けていた。
彼女の想いは、幼なじみに向けられており、他の者をよせつけなかった。
幼なじみのシェーンは、気が弱く人前ではよくおどおどしていたが、自然を愛し心優しい少年だとレイアは知っていた。
彼を好きになった理由はそれだけではないのだが、問われると一

番にそう答えてしまうのだ。
ただその問いはレイアの中でしまわれているものであり、最近まで表舞台へ出ることはなかった。
最近になって、いつまでも婚約を断り続けている娘に、不安を感じた両親が問いつめて判明したのである。
思いを馳せる男性がいたことを両親は喜び、それが屈強な男でなくとも歓迎してくれた。
早々に縁談の話を持ちかけようとした両親にレイアは――
「シェーンから言ってくれるのを待ちたい……」
と、赤らめた顔で健気に止めたのだった。
縁談を持ちかけるのをやめたものの、口から漏れる幸せは止めることができず、噂となって広がりシェーン本人へ届くはめになった。
シェーンの方も、レイアには恋心を抱いていた。
が、気弱な性格であったため、自分より外見が良く堂々とレイアに婚約をせまるほかの男の姿を見ると気がひけ、雑談の場でさえ、自分もレイアが好きだと名乗り出ることができなかった。
本人の前で名乗り出たところで、相手にもされないだろうと決めつけていた。
そんな経緯もあり、自分の心を偽っていたのだが、噂を聞きつけると現金なもので即婚約を持ちかけたのだった。
ただ、やはり気弱な性格なためか、本人を前にすると正式な婚約を取りつけることができず、恋人になったような感じだった。
それでもようやく一歩先に進めた二人は、幸せ一杯であった。

レイアはなにやら騒がしい気がして、髪を梳く手を止めた。
夜着の上にガウンを羽織ると、一階の両親の元へむかった。

レイアは自分の不幸を呪わずにはいられなかった。
つい先ほどまで描いていた、幸福の未来はあっけなく打ち壊され

た。
突然の異形の訪問者に、愛する両親を殺され、ようやく愛を打ち明けてくれた最愛の人さえも、今しがた永遠の別れをしなければならなかったのだ。
悲しむ暇もなく、襲い掛かってくる異形の者・蜥蜴人から逃げなければならなかった。
共に死のうなどとの考えは、あの食い殺された残虐な情景を見せられては思いつきもしなかった。
「なぜ、こんなことに……　どうして、こんなことに……」
逃げるレイアは、狂ったように自問自答を繰り返す。
普段ならば、こんな夜更けは夢の中だというのに。
シェーンと共に逃げ出したときは、追いかけてくる蜥蜴人は三体いた。今は一体、倒れたシェーンに喰らいつく二体のようすが思い出される。
きっと私を食べるんだわ、想像するだけでおぞましい恐怖が襲ってくる。
背中に灼熱の衝撃が走る！
あまりの痛みに足をもつれさせ、転倒してしまうレイア。
闇夜に浮かび迫ってくる金色の双眸は、より一層恐怖を煽り立てた。
腰を抜かし、叫び声をあげることもできず、口をパクパクするだけだった。
ご馳走にようやくありつけたことに、狂喜するような咆哮をあげ、蜥蜴人が曲刀を振り上げた。
月夜の明かりが、刃に当たりキラリと輝く。レイアは恐怖から逃れるように、瞳を固く瞑った。

闇夜の中に、荒く吐きだされる息が三つ、時たま弾かれる小石の音がそれに混ざる。

アルマら三人だ。
「アルマ！　このままじゃあマドゥがもたない。休まないまでも早歩きに変えよう」
いつ倒れてもおかしくない状態のマドゥを慮(おもんぱか)って、レオンが先頭を走るアルマに呼びかける。
焦るには理由があった、最初に向ったシェルターが混雑の極みにあり、入ることができなかったためだ。
だからといって、息がきれて動けなくなっては急いだ意味がない。
「わかった、少し休憩しよう。ここは蜥蜴人にまだ襲われてないみたいだからな」
「アニキ、あたいならまだまだ大丈夫だよ」
ふぅ～と大きく息を吐いたアルマが、俺が疲れたと言い、腰を下ろした。
兄が休憩してしまっては、従うしかないとマドゥもならった。
三人が一息ついた、そんな時だった。
「逃げろー僕にかまわず逃げるんだー」
と、誰かを庇う言葉の後に、命を散らしたであろう絶叫が闇の中に響き渡っていた。
すぐ起き上がったのはアルマであった。
漁師で鍛えられた体力には、まだまだ余裕がうかがえた。
「レオンはマドゥを見ていてくれ、様子を見てくる」
必ず一緒に来るというであろうレオンに、先に釘をさす。彼の体力もかなり消耗してるのが分かっていたからだ。
「ここで一人で行動するのは危険だ、動くのなら三人で動こう」
レオンの案にマドゥも、うんうんと頷き同意している。彼女の目には、置いていかないでと訴えるような感もあった。
「わかった、三人で行こう」
声が聞こえた場所を辿っていくと、長く伸びた影が前を横切った。
追うように、続く影がもう一つ。

明らかに人とは違うものだった。
家の物陰に隠れ込んでしまった人物を三人は必死に追った。
先頭を行くアルマは、例え追いついたとしても、相手があのおぞましい蜥蜴人だったら、俺はなんの役にも立たないのではと考えていた。
二人の安全を考えるならば、逆に早くこの場を立ち去るべきではないのか？　と。
表面的に見れば、武器も持たない若輩三人が、駆けつけようとどうこうなるものではない。逃げ出したとしても、誰からも非難されることはないだろう。
自問自答を繰り返す中、蜥蜴人の背が目に飛び込む。手には曲刀と小盾を持っている。
走るのをやめ、じりじりと獲物を追い込んでいるかのようだった。
視線を少し下に向けると、月明かりを浴びた、顔面蒼白の女性が視界に入った。
振り上げられた曲刀が降ろされれば、女性の命はないだろう。
そう思った途端、
「うおぉぉぉぉ」
アルマは奇声を発し、迷うことなく蜥蜴人へ飛び込んでいった。
突然の訪問者に、蜥蜴人は涎のたらした顔を、声のほうへ向けた。
アルマの突進は、背中を見事に捕らえ、曲刀が振り下ろされるのを防いだ。
幸いにも突進の折、曲刀を蜥蜴人が手放したため、錐揉み状態となったアルマは地面へ衝突した痛みと擦り傷程度ですんだ。
「ぐごぉぉぉぉ」
待ちに待った食事を邪魔され、蜥蜴人はあからさまな不快な声をあげた。
そして大きく裂けた口を、できる限りひろげ咬みついてきた。
ガキッ
歯と歯が目的のものを失い、ぶつかり音を立てる。

少し遅れて駆けつけたレオンが、蜥蜴人を後方から羽交い絞めにしたのだ。
「今のうちに」
逃げろというのか、やっつけろというのか、レオンの言葉はどちらとも取れた。
九死に一生を得たアルマは、無我夢中で拾い上げた曲刀で蜥蜴人を袈裟斬りにした。
危なくレオンもろとも斬られてしまうところだったが、騎士見習いであった彼は、状況をすばやく判断し、振り下ろされる直前に拘束の腕を放し難を逃れた。

「大変だよアニキ、この人大怪我しちゃってるよ」
気絶した女性を抱えあげたマドゥが、手をべっとりと血で濡らし叫んでいる。
その声は今にも泣き出しそうである。
一人でこの状況に陥ったならば、発狂していたかもしれない。
それだけ、彼女の目前で起こった一連の出来事は、衝撃的であった。
一方アルマも、人ならざる者とはいえ、殺害してしまったという事実に気の抜けたように、放心していた。
生死をかける場数をこなしているのか、レオンは比較的冷静で対処していた。
アルマの肩をぽんと叩き労う、そして怪我をした女性を抱きかかえているマドゥのもとへ行き、怪我の具合を確認している。
「うぅ……」
気を失っていたレイアは、呻き声を漏らし、生きていることを周囲に知らしめた。
「助けて！　あの人が、両親が化物に襲われて……　うっ……」
意識を取り戻したレイアは、人の顔を見た安心感からか、声を張りあげ助けを求めた。

が、背中の痛みにくわえ、瞳に映った人たちはまだ幼く助けを求めるべきでない存在だと思われた。
それどころか、この中では自分が年配であることを理解し、泣き叫びたい感情を押し殺した。
「取り乱してごめんなさい。まだ二匹の化物が近くにいるわ、早くこの場を離れないと」
背中の痛みは尋常ではなかったが、無理やり笑顔を作り笑ってみせる。
マドゥは起き上がるのを手伝い、兄から受け取った布切れを傷口にあてがった。
布はすばやく血を吸い込み、赤く染め上がった。

「レイアさん大丈夫？」
マドゥが数歩、歩くたびに気遣い声をかける。
止血が必要だと感じ、非常時だからと、人のいなくなった民家へ入り手ごろな衣服を拝借し、着込むと同時に傷口を覆ったのだ。
出血はほぼ収まってきたが、いずこかで正式な手当てを受けなければいけないだろう。
気遣うマドゥらに、レイアは平気です、と気丈に答え続けていた。
目的のシェルター付近へ近づくと、人の喧騒が大きく聞こえてきた。
入り口がある建物には、人々が詰めかけごった返している。
「ここまでくれば、一安心だね」
他の人々を多く見れたせいか、マドゥは安心しきったようすで言った。
しかしながら、我さきと争うように詰めかける人々に、アルマとレオンは顔を合わせいぶかしんでいた。
敵は正体も知れぬ蜥蜴人であるのにもかかわらず、ここの人々は、己の保身を優先として、入り口への道を塞ぐ他の者を敵視している

ように見えたからだ。
「ここは危ないんじゃないかな。こんな状態であいつらに襲われたりでもしたら……」
レオンの発言は的を得ているように思えた。
しかし怪我をしたレイアのことを考えると、別のシェルターへの移動は厳しいと思えた。
「とりあえず、治療できる人がいないか聞いてくる」
「わかった」
短く答えたレオンであったが、この状況下では不可能だろうと思っていた。
火の手は街の半分を多い尽くすように燃え上がり、闇夜の不便さを覆い隠していた。

ぎゃぁーと叫び声が一度あがると、連鎖反応のように人々の間に広がっていった。
レオンの案じたとおり、蜥蜴人の一団が攻めよせてきたのだ。
人々は更にシャルター入り口へと、集まり蜥蜴人の格好の的となってしまった。
泣き叫ぶ人々の様子は、まさに地獄絵図のようであった。
悲鳴を聞いたアルマは、いち早くマドゥらのもとへ戻り、レオンの判断によりこの場を去ったので難を逃れることができた。
だからといって、安全になったわけではない。この状況ではもうどこに蜥蜴人が隠れ潜んでいるか、見当もつかないからだ。
「街をでよう、この様子じゃどこのシェルターも危ない。南に下ったところに漁師の集落がある、三日は歩かないと辿りつけないけど、ここに留まるよりいい。そのままリスト島へ逃げ延びるか、大回りしてもらってグラナムへ逃げるのもいい、あこには父さんたちがいるはずだし」
慌ててしゃべるアルマの言葉に、レオン、マドゥは即頷こうとしたが、レイアのことを思い出し彼女を見つめる。

あの怪我で動くのは、知識のない自分らでも判断できた、危険なのだ。
「出ましょう街を！　それと私が足手まといになったら、迷わず置いていってほしい」
以外にも最初に、賛同してきたのはレイアだった。
彼女の瞳には、揺るがない決心がうかがえた。
「わかりました。でも置いていくなんて真似は、絶対にしませんけどね」
レオンの答えに、さすがだなとアルマは微笑んだ。

脱出の強行軍は、夜が明けるまで続けられた。
いつ追っかけてくるかわからない蜥蜴人に、恐れたためだ。
さすがに一晩中歩き続けた疲れと、襲ってくる睡魔には抗えず、朝に野営をとることにした。
街が全焼したのだろうか、ここまで離れた場所にまで焦げ臭さが漂ってきている。
レイアは下生えに横になると、すぐ寝息を立てはじめたが、それと同時に高熱と寒気に耐え切れず、体を小刻みに振るわしうなされはじめた。
火を焚こうと考えたが、道具もない状況では、誰も火を熾(おこ)すことができなかった。しかたなく、マドゥが抱きつくような形で一緒に寝て、アルマ、レオンも寄り添うように近くへ座った。

パチパチと小枝が爆ぜる音が聞こえる。
街を逃げ出してから、すでに三日経とうとしている。
初日に道なき道を通ったためか、レイアの具合が思わしくないためなのか、予定より進行は遅れていた。
それでも道中、火打ちになりそうな石を拾ったり、果実をもいだりして最初の悲惨な野営とは断然ちがっていた。

レイアも今日は比較的落ち着いて、眠っているようだった。アルマも疲れきったように、隣で並んで寝ている。
「これからどうなっちゃうんだろうね、あたいたちは……」
マドゥは、昼間集めた小枝を焚き火の中へ、放り投げながら隣のレオンへ疑問を投げかける。
「僕には、海へ放り出されたときから、先がまったく見えないでいるよ」
軽い冗談のつもりだったのだが、マドゥは辛い過去を思い出させてしまったと、ごめんなさいといい、ふさぎ込んでしまった。
「心配しなくていいよ、蜥蜴人が襲ってきても僕がマドゥを守ってあげるから」
自信ありげに曲刀を手にとって見せる。
事実、レオンは街から逃げだす際に、奪った曲刀で二体もの蜥蜴人を葬っている。
「本当に？　本当に守ってくれる？」
「うん、守るよ。僕がずっと守ってあげるよ」
腕にしがみつき、すがるように見つめてくるマドゥに、レオンは少し戸惑いながらも答えた。
「あたいはまだ十一だけど、来年、遅くても十三歳になったら成人の儀を済ましてる。そしたらレオンの嫁になってあげる。まっさきに婚約を申し込んでくるんだよ」
マドゥが勘違いしたのか、レオンがその気で言ったのか、話がおかしな方向へいっているな、と目が覚めたアルマは起き上がるに起き上がれずに、寝たふりのまま恋人同士のような会話を聞かされ続けた。
それでもここ数日、厳しい表情しかとれなかった自分が、微笑んでいることに気がつくと嬉しく思えた。それが最愛の妹が他の男に、取られていくような喪失感があったとしてもだ。
五日目の昼に、目的の集落へ辿りつくことができた。

同じ考えをした者も多く、ここは難民であふれかえっていた。
タッフリールの警備隊の知り合いがいたので、レイアの治療を真っ先にお願いした。
傷口から菌が入り込み、化膿したらしくこのまま放っておけば危なかったということだった。
うつ伏せに寝かされたレイアは、ようやく心地よい寝息を立てているように思えた。
五日間の強行軍で、彼女はげっそりと頬が痩せこけ、集落に辿りつくと同時に力尽きたように倒れ込んだ。
集落では二日前から難民が訪れ、漁師に頼んで島から脱出しだしているらしい。
急を要しだしたのは、昨夜から、ここへ向っている蜥蜴人の一団が目撃されたらしい。
難民の代表者たる警備隊員と漁師たちと、協議が行われた。
出た結論は、漁師の家族を優先し難民からは女子供が優先して乗船すること。
警備隊は難民から勇士を募って、蜥蜴人の一団を集落前で迎え撃つのが、乗船させてもらうせめてもの恩返しだった。
迎え撃つ勇士らは、ろくな装備もなく、数も多くはないだろう。まさに死を覚悟した上でだった。そのため、彼らの親族は優先して船へ乗せてもらえることが、約束されていた。
アルマは知人の警備隊員からこの話を聞き、勇士に志願した。
三人を船へ乗せてもらうことを条件に……

三人だけで先に脱出する話を聞いて、マドゥは大声をあげて反対した。
眠っていたレイアも、その声で目が覚め何事ですかと話しに加わる。
三人それぞれ言いたいことがあるらしく、アルマは説得には苦労

するなと、顔を歪めた。
「レイアさん貴女はまず怪我人だ、真っ先に乗ってもらいます。反対はさせません」
強い口調で言い放ち、有無を言わせないようにする。ここまで迷惑をかけたんですから、と言われるとさすがにレイアは黙るしかなかった。
「レオンの強さは十分にわかっているが、蜥蜴人らを一端退けた後、脱出はどうするんだ？　俺なら泳いでリトス島まで渡る自信はあるが、難しいだろ？」
無論、そんな自信はアルマにもないのだが、ここは見栄を張らせてもらった。
食い下がるレオンに――
「マドゥを守るって誓ったんだろ。騎士なら約束はたがえるなよ」
と、耳元で囁かれては、従うしかなかった。
問題は我が妹だなと、マドゥに向き直る。
「マドゥ……　おまえには、この四人が皆無事に逃げ出せる方法がほかにあるか？」
マドゥを納得させるには、まずは考え込ませ、頭を混乱状態に陥らせるのが一番である。
アルマは兄として培われてきた経験を存分に生かした。
「これなら皆助かるんだ、あとでリトス島で会おう。俺がいままで嘘ついたり、騙したことがあったか？　それにさ、こういうのを世間じゃ傭兵って呼ぶんだぜ、かっこよくないか？」
卑怯な言いくるめ方だなと、アルマ本人が思うほどであったが、そうまで言われてマドゥは承知せずにはいられなかった。

船が並ぶ船着場の入り口に、急きょ柵が打ち付けられはじめた。
それを見かけた難民たちが、何事かとざわめきだす。そして船へ急いで乗り込む漁師の家族らを見て、状況を判断したらしい。
難民たちが、俺たちも乗せろと詰めかけてきたが、作られた柵と

警備隊によってあっさりと阻まれた。必死に逃げ延びてきた難民たちには、それほどの気力さえ残ってはいなかった。
事情をしらない難民らの大半は、混雑しないための処置だとの説明を信じ、各々の非難場へ帰っていった。集落に残った警備隊は、出向いていった仲間らの戦いの合図と同時に難民への非難を告げる手筈になっている。
それまでには、船着場から船は一隻もいなくなっているはずだから……

集落の外では、なだらかな丘陵となっている頂点を境界線として、警備隊が陣取っている。下り坂を利用し、勢いをつけての突撃を避けるためである。
のそりのそりと蜥蜴人が遠くに見え始めたと思うと、その数は予想を反し超えていき、三百から五百体の軍勢になっていた。
警備隊は勇士を含めても、百いるかどうかだ。
それでもここに集まった者は、時間を稼げればよいとわかっており、討ち破る必要はないと隊長の檄を入れられていたため、さほどの混乱はなかった。
ここに参加しているアルマも、時間を稼ぎいざとなったら、逃げ出せばいいと考えていた。
時折り吹き抜ける海風に、思い出したように集落へと目をやる。
ほどなく、蜥蜴人の先頭が数メートルの地点まできたが、警備隊らは動かないでいた。
少しでも時間を稼ごうと考えたためである。
そして目前まで迫り、互いが気合の声を発し戦いの幕が切って落とされた。

戦いは数に劣るものの、組織的に動く人々は、戦略もなくむやみやたらに突進を繰り返す蜥蜴人に奮戦した。
一時期は、撃退できるのではとさえ思ったほどだ。

だが、やはり数には勝てず、元々万全な状態でない人々には疲れが見え始めていた。
それでも踏ん張り、船が出終えるまでは十分に持ちこたえることが、できると誰もが思った。
不可思議な一撃が食らわされるまでは……
突然、炎の塊が蜥蜴人と戦う人々の上から舞い落ち、蜥蜴人もろとも吹き飛ばした。
直撃を受けた、人間、蜥蜴人は瞬時に絶命したようだ。
炎の塊は一度では終らず、幾度も降り注ぎ警備隊を全滅へと追い込んだ。
アルマは、二度目の爆風で弾き飛ばされ、砂にまみれ倒れこんだ。
蜥蜴人は死亡した人間らには興味がないのか、倒れ蠢く人を無視するかのように、食らうことなく集落へと足を向けていた。

「蜥蜴人が攻めてきたぞー」
その報に、船の出港を見守っていた警備隊は慌てふためいた。
早すぎると内心で愚痴った。
それが百人もの勇士らが、敗れ去ったのか、はたまた勘のいい者が蜥蜴人を発見したのだろうか？　どの道、混乱は避けれないと覚悟をした。
「はやく！　準備できた船は早く出てください！」
この緊迫した叫びがまずかったのか、蜥蜴人の言葉を聞いた時点でだったのか、混乱は既に生じていた。
船に乗った者は、いまだ乗り込みを続けているのにも関わらず、早く船を出せと我侭を言い放っている。しまいにはそれを注意しなだめる者と、取っ組み合いを始めてしまう、混乱は広がる一方だった。
マドゥらの乗り込んだ船は、後から割り込ませてもらっただけあり、出港は最後のほうだった。小さな貨物室の積み込まれた物資のわずかな上の空間に、三人は身をこごませていた。

そんな場所だったため、乗り込んだのは早かったのだが、いつまで経っても出港しない船にマドゥの心はかき乱され、恐怖が募っていた。
「なんか外が騒がしいけど、大丈夫なのかな？」
貨物室の戸が閉じられているため、明確な声は聞こえてこなかったが、言い争っている感は十分に伝わってきた。
恐怖心に駆られながらも、マドゥは荷物の上を器用に移動し、戸に手をかけ僅かながらに開いた。

アルマは、ぼーっとする頭を必死に振り、状況を判断しようと努めていた。
体の至るところが悲鳴をあげているようだったが、致命傷ではなかった。
僅かながらにでも気を失っていたのだろうか、蜥蜴人の軍勢は辺りには見受けられなかった。
キーンと苛立たせる耳鳴りが収まっていくと、人々の悲鳴が遠くから聞こえてきた。
通過した蜥蜴人が、人々を襲っているからだろうと容易に想像ができた。
そして渾身の力をこめ、立ち上がると転げ落ちていた鍬を拾い上げ、走り出した。
丘陵な丘から見た限りでは、まだ何隻かの船が出港していないように見えた。
それを防ぐかのように向っている、蜥蜴人の一団も見受けられた。
「くそっ……」
足止めさえできなかった自分へ腹が立った。
なんとしてでも船は無事に出港させなければとの、強い一心が今のアルマをつき動かしていた。

船着場への道中、蜥蜴人が人々を襲い、アルマ自身へも襲い掛かってきたが、心を鬼として助けを呼ぶ声を無視し走り続けた。獲物が間近に多数存在する現状では、遠く離れていく獲物には関心がないようだった。

船着場へ到着すると、一人の警備隊が必死に侵入を果たそうとしている、蜥蜴人と懸命に格闘していた。

すでに柵は意味をなくし、最後の砦の警備隊を処分しようとしている。

「早く船をー」

必死に後ろへ向って叫んでいる。

警備隊を無視して船へと向っている蜥蜴人に、アルマは銛を投げつけた。

漁師生活で鍛え上げられた銛の腕前は確かで、蜥蜴人の背中を貫いた。勢い余って蜥蜴人は海中へ転落した。

水が苦手らしく、必死にもがいている。

そう簡単にあがってはこれないだろうと、アルマはもう一体の腕にしがみつき、船への上陸を拒んだ。

「アニキ！」

突然、船のほうから声が聞こえた。聞き間違えるはずもないマドゥの声だ。

彼女は必死に早く乗ってと叫んでいる。

「いいから早く船をだせ」

聞こえるかどうかわからないが、ただ叫ぶしかアルマにはできなかった。

ウガァァァ

耳元で唸るような声が聞こえたかと思うと、右肩に激痛が走る。

視線を向けると、蜥蜴人が噛みついていた。残った一人の警備隊も討ち取られたようで、視界に入ってこなかった。

それでもアルマはつかんだ腕を離さず、さらにその脇を抜けて行こうとした別の蜥蜴人をつかんでいる蜥蜴人を揺さぶりぶつけ邪魔

をした。
邪魔をされ怒った蜥蜴人は、仲間を気にすることなく曲刀を振り上げアルマを袈裟斬りとした。
血吹雪が跳び、マドゥの絶叫が遠くで聞こえたような気がした。
アルマの意思はここで途絶えた。
「アニキー、アニキー」
船から飛び出そうとするマドゥを、レオンが必死に食い止める。
船を繋ぎとめていた縄が断ち切られ、動き出した今、船を降りればもう戻ってくることができず、それは死を意味する。
「アルマの死を無駄にするのか！　耐えるんだマドゥ」
泣き崩れるマドゥを慰めようと、肩に手を置こうとしたその時！
グガァァァ
と、叫びと共に一体の蜥蜴人が跳躍をみせ、船に乗り込んできた。
着地で体勢を崩した蜥蜴人だったが、すぐに持ち直し曲刀を振り上げ襲い掛かった。
人が大勢詰めこむ乗った船では、蜥蜴人が動いただけで人が海へ転落した。
背中に吊るした曲刀に手を伸ばしたレオンだったが、この場で振り回すのは不可能だと悟った。
「マドゥさがっていて」
そしてこの場を救うにはこれしかないと、突進していった。
見事に決まったのだが、弾き飛ばされた蜥蜴人は、最後の抵抗にとレオンをつかみ、海中へ共に引きずりこんだ。
船先に駆け出したマドゥは、もがき合いながら沈んでいくレオンと蜥蜴人を、泣き叫びながら見守ることしかできなかった。

遠ざかる船を眺めながら、意識を取り戻したアルマは動かぬ体、朦朧とする意識から直に訪れるであろう死を受け入れていた。
胸中には、最愛の妹マドゥに対する懺悔だけであった。

こうなることは、十中八九想像は出来たのである。マドゥらが無事脱出してくれさえすれば、命を投げ出しても良いと思っていたのだ。
後はレオンがマドゥを守ってくれるはずだ、何も心配することはない。
船が見えなくなれば、目を閉じれば終るのだ……
そんな考えに浸る中、老人らしき声がかすかに聞こえてきた。
「ふぉふぉふぉ、なんとか逃げ出したようじゃが、まだまだ安心してはいかんぞ」
老人は手にした杖を平行にかまえると、ぶつぶつと言葉を紡いだ。
炎の塊が老人の数メートル先に現れ、先ほど警備隊を襲った物と同一だとわかる。
「させ……　ない……　ぞ……」
動かない体が動き、老人の足首をつかむ。
「ほう、まだ息があるものがおったか……　ふむ、汝に免じてあの一隻はのがしてやろうて」
老人が垂直に持ち直した杖を、トンと地面を叩くと炎の塊はかき消えた。
そしてパンパンと手を叩くと、現れた蜥蜴人が現れた。
「そやつを連れてゆけ、不屈の魂の持ち主は良い材料となる、ふぉふぉふぉ」
死んでいるのではなかろうかという、血まみれの人間を二体の蜥蜴人は、つかみあげると何処へとなく運んでいった。

陸から離れた船は、ようやく一息つける状態になっていた。
出港の際の混雑と、乗り込んできた蜥蜴人のおかげで怪我を負った人が大勢いた。
レイアは自らの怪我をおしてまで、怪我人の治療にあたっていた。
その無理がたたったのか、出港して三日目、再び高熱を出し倒れ

てしまった。
「がんばって、あと一日もすれば陸につくって」
マドゥが手を取り必死に励ます。
これ以上、目の前で人が死んでいくのが耐えれないのであろう。
兄を亡くし、恋心を抱き始めていたレオンを失い、知り合って間もないとはいえ、ここまで必死に生きてきた仲間である。
失いたくない。
「ごめんね、心配かけて……　マドゥ……　貴女は生き延びるのよ」
レイアは新鮮な空気が吸いたいと、つけ加え貨物室からマドゥの肩を借り外へ出た。
急いで出港したため、十分な食料が詰めこめず、飢えが人々の心を荒んだものへと変えていた。
怪我がもとで亡くなった人の遺体は、海の中へ葬られた。不必要な積荷を減らし船足を早くするためにだ。
泣きながら家族の遺体と別れる姿に、マドゥは貨物室の荷物の一つでも捨てればいいのにと思えてならなかった。
そして心無い人は、重病で助かる見込みのないものさえ、海へ放り投げてしまえという有様だった。
そんなわけで、貨物室へ篭もり、レイアを看ていたわけだ。
本人が外の空気を吸いたいというのであれば、聞いてあげないわけにもいかなかった。
それがどんな結果を招くか、どんな決意からそういったのかを幼いマドゥはまだわからなかったのだ。
マドゥの肩を借りながらも、よれよれで懸命に歩くレイアに侮蔑の視線を送るものはいても、手伝おうとする者は誰一人としていなかった。
そんな一人にマドゥは、キッと強い視線を送り返した。
「彼らを責めないでマドゥ、みんな苦しくて仕方がないのよ。こんな時に傷を心を癒せる力があればどんなに良かったか……」
弱々しく話すレイアに、名案を思いついたように話す。

「リトスのオリジンベルという村には、何百年も生きているってすごいエテルナって司祭様がいるらしいよ。どんな大怪我だって直してくれるんだって。ねっ、すごいでしょ、怪我を治してもらったら、弟子入りしようよ、二人でさ。そしたら死ぬ人なんてきっといなくなるよ……」

レイアを励ますために言った言葉だか、兄、レオンの死を思い出し感極まり涙ぐんでしまう。

そんなマドゥの頭に手を置き、ありがとう、とレイアはか細く微笑んだ。

あふれる涙を拭おうと、瞳に手を当てたマドゥが油断した瞬間……

レイアはマドゥの腕をすり抜け、海へ身を投じた。

慌てて、救助を求め叫ぶマドゥであったが、周囲の反応は冷たく。

舵を取っている漁師を引っ張りつれてきたときには、レイアの姿は海中へ沈み見えなくなっていた。

「悪いな嬢ちゃん、こうなってはもう手遅れだ」

残念だけど、と漁師はつけくわえると、舵を取りに持ち場へ戻った。

この状況下では、漁師には舵を取り、一刻も早く上陸するしか手立てはなかった。

落ちたのに気がつき、覗き込んでいた少年は――

「落ちたお姉ちゃんが、光に包まれて消えていったよ。きっとお姉ちゃんは天国へいったんだね」

励ましのつもりなのか、純粋にそう思っているだけなのだろうか、マドゥより幼い少年はそう告げた。

静まり返る船上で――

「ひっひっひ、そりゃすげーや」

嫌味な笑い声が響いた。

心無い言葉をかけてきた男は、どの道助からなかったんだよ、とつけくわえマドゥの心情を逆なでにした。

気がつくと、男にまたがったマドゥが拳を血だらけにして殴り続

けていた。
男はヒィヒィ叫び、助けを求めたが、他の乗り合わせた者は自業自得と思ったのか、助けようとはせず、再び駆けつけた漁師がマドゥを止め、ようやく解放された。
マドゥは男から引き剥がされてもまだ、男に襲いかかろうとしていたので、貨物室に閉じ込められた形となった。

その扉が開かれたのは、陸が見えたとの歓声があがった数日後のことであった。
「なんじゃこやつは」
眩しい日差しと共に、甲高いおかしな発音の男の声が聞こえた。
船頭が例の乱闘騒ぎのやつです、と説明するとふ～んと関心があるのかないのかどちらともいえない返事をし、値踏みするようにマドゥを眺める。
「わしの、品物には手をつけておらんだろうな」
積み重ねられた品物を眺めていく。どうやら貨物室の品は、この男のものであるらしい。
光に慣れたマドゥの目に映ったのは、巨漢な男であった。といっても鍛え上げられた肉体ではなく、贅肉たっぷりといった感じだ。
「ぬしはあの男をのしたそうだが、傭兵か何かなのか？」
巨漢に今まで無反応だったマドゥが、傭兵という言葉にピクッと反応を示す。
「そうだ！　あたいは傭兵だ、あんなやつなんかいくらでも、のしてやる」
みんなの仇だといわんばかりの形相で、巨漢を睨みつけた。
「よしよし、それじゃあわしがおまえを雇ってやる」
手付金とばかりに、取り出した乾燥させた果実の実を放り投げる。
腹を空かしていたマドゥは、迷うことなく拾いかじりついた。
船頭がまだ子供ですよ、と耳打ちした。

「だからよいのじゃよ、悪知恵を働くようになったものは信用できん、兄も信用できる片腕を作っておけといっておったしの」
ふぉふぉふぉ、と贅肉をふらしながら巨漢は笑った。
「わしの名はフルゴリージョじゃ、ぬしの名は？」
「あたいの名はマ……　アルマ……　そうアルマドゥーラだ！」
なぜその時そう名乗ったか、マドゥにはわからなかった。
兄を死を認めたくなかったからか、生きた証を残しておきたかったからなのか……
それはマドゥ本人でさえ、永遠の謎とされた。
その後、マドゥはアルマドゥーラとして貿易商人フルゴリージョの雇われ傭兵となったのだった。

第一章～逃亡～（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
この後、主人公がかわり話は続きますが、別物の話になるわけではありません。
そしてこの一章に登場した人物らも再び登場します。
章ごとに主人公が違い、現れた魔物、崩壊していく世界を舞台に駆け回る予定です。
この作品を読んで何か思うことがあったなら感想の一言でもお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1121d/

ディプスファンタジア～World that was～

2010年10月16日08時46分発行